

【優秀賞】

「共に歩む北方領土へ」

上富良野町立上富良野中学校
2年 北村 奈々

私は、北方領土についてとても強い関心を持ち、そして一秒でも早く、北方領土が北方領土の元島民の方々に返還されることを願っています。ですが、私は北方領土について、返還だけではなく、ロシアの方々と共存するという考えが日本とロシアにとって一番いいことだと思います。

私が深く北方領土について関心をもつようになったきっかけは、今年の夏、根室市で行われた北方領土問題対策協会主催の青少年現地研修会に参加したことです。そこで、北方領土について勉強し、北方領土の住民の方のお話を聞きました。そして、各地方からきた中学生の人たちと北方領土について話し合いました。そこで私たちは、北方領土をただ返還してもらうだけではなく、今北方領土に住むロシア人の方々と、共存していくという、方法がいいと思いました。

そう思ったきっかけの一つが、北方領土の住民の得能宏さんがモデルとなった、アニメーション映画「ジョバンニの島」を見たことです。主人公の純平（得能宏さん）は、戦争中ではありましたが、いつものように、ごくごく普通の日々を送っていました。ですが、そんなある日、日本は降伏し戦争に敗れてしまいます。そして、色丹島にアメリカ軍ではなく、ソ連軍が上陸してきました。学校では授業中にソ連軍が突入してきました。ですが、先生は授業を止めず、おびえながらも、授業を続け、ある生徒が問題の答えを間違えてしまいます。そこに、突入してきた軍の中の一番偉い軍人が、その間違えた問題を直してくれたそうです。他には、家を荒らされ、さらには、家を追い出されてとなりの馬小屋で暮らすことになってしまうなどがありました。ですが、そんなある日、あることがきっかけで、将校の娘であるターニャという少女と出会います。ターニャは、純平とその弟の寛太のことを大切な友人として接していました。ターニャの家族もターニャの友人として持て成してくれていました。純平とターニャ、寛太はソ連と日本ではなく、お互いを友人として信頼しあっていました。そして、もう一人、島民の語り部である、歯舞群島出身の高塚正勝さんの話でも、不法占拠されている中で、ソ連の子供たちと遊ぶなど、ソ連の方々と交流があったそうです。つらい生活の中でも、喜びや楽しさがありました。

そして、もう一つのきっかけは、今北方領土に住んでいるロシア人の方々も、昔の得能宏さん達のように、大切な故郷になっていることです。もし、北方領土が日本に返還されたとしても、今住んでいるロシア人の方々はどうなってしまうのでしょうか。昔のソ連のように、今北方領土に住んでいるロシア人の方々を追い出してしまうのでしょうか。それだと、昔のソ連軍と同じことをしてしまいます。そんな悲劇を繰り返さないためにも、私は共存していく道を選びたいと思いました。しかし、その中にもやはり問題が出てきます。例えば、水産資源や排他的経済水域などの問題を考えなくてははいけません。簡単なことではないかもしれませんが、共に分け合うことや、制限などしていけば、お互いのものを共有し合うなどできるかもしれません。現実にするのは、難しいかもしれませんが、可能性はないわけではありません。

ですから私は、北方領土を返還するだけでなく、昔の得能宏さんや高塚正勝さんのように、同じ人間として、争うのではなく、日本人とロシア人が共に、友人や仲間として手を取り合っていければ、お互いにとって一番いいことだと思います。

私はそのために、語り部の方々の意思を引き継ぎ、まずは友人や家族、そして日本中の方々に伝わっていくよう積極的に活動していきます。